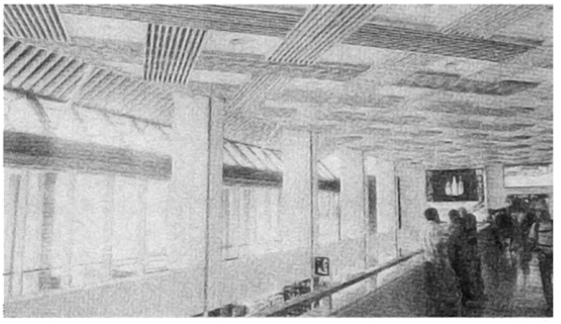
他に例のない木材多用空間

熊本県産材杉、桧227.3㎥使用

阿蘇くまもと空港

熊本の空の玄関口「阿蘇くまもと空港」が1日、2年に及んだ今回の増改築工事を完了し、一新した。空港の建築物では、全国でも他に例のない地域産木材を多用（合計227・3立方㍍）した内装木質化のデザインになっており、木材の持つ温かみが生かされた快適な空間が話題を集めている。



2階出発ロビーから吹き抜け空間の1階チケットカウンターや外壁（ガラス）を眺める

阿蘇くまもと空港の利用客数は2011年実績で約278万人。国内線の年間旅客数は全国第9位の規模にあり、今後はアジアを中心に新たな国際路線誘致にも力を入れる。

今回の増改築工事のコンセプトは旅客サービス、耐震性能、環境性能の向上。その旅客サービスの部分で、新ターミナルビルは熊本城をイメージした斬新な内外装デザインに一新することで利用客を迎え、観光、文化等の交流の要にしていく計画のなかで、「施主など関係者から県産木材を多く使いたいという意向が強かった」（設計関係者）。

今回の工事で最後に完成したのは、2階出発ロビーを中心に広く設置された杉天井材。格子状のデザインに組まれ、1階のチケットカウンターからも、吹き抜け空間になっているため同天井が見える。ガラス壁には建物内側からルーバー状に杉材が使われ、天井とも連動したデザインになっている。

自動販売機周りや今回デザインの統一された案内サイン（看板）には桧が採用された。玄関扉にはケヤキが使われている。外観は熊本城をイメージした大屋根（太陽光発電設備なども設置）から直射日光と熱を和らげるための大ひさしが特徴的だが、ここにも杉材（保存処理）が多量に採用された。

設計は日建設計、施工は大成・岩永・建吉特定建設工事共同企業体。製材は県業界団体が各地域のメーカーに杉、桧乾燥材の生産を依頼（すべて熊本県産材で山都37％、阿蘇33％、天草15％、県北8％、球磨・八代、芦北地域7％）。これを熊本市内の製品市場に集約し、集成を含めた最終加工をウッディファームが担当した。

県産材使用量は、天井・壁ルーバーは杉上小材で139・7立方㍍。規格寸法は30×110、105×240、75×200、45×105・150㍉など。大ひさしは杉（九州木材工業・エコアコールウッド）83・8立方㍍。同75×210、100㍉など。桧上小材は2・6立方㍍。同30×110、25×105、30×135など。ケヤキは1・2立方㍍で、合計227・3立方㍍に及んだ。